

今回は、みのかも定住自立圏・里山まちづくり事業の報告です。

◇ 高校生のための聞き書き講習会

日時：令和5年10月7日（土）・8日（日） 10:00～16:00

場所：リバーポートパーク美濃加茂

美濃加茂市御門町 2-6-6

主催：美濃加茂市、川辺町、白川町、東白川村

講師：吉野 奈保子氏

NPO 法人共存の森ネットワーク理事・事務局長

参加：関高生6名 加茂高生1名

趣旨：里山の自然の中で暮らしてきた方にお話を聞き作品化する「聞き書き」とおして、その地域の伝統的な暮らしの知恵を残すとともに、自分自身の生き方や持続可能な未来を考える。



◇ なぜ今、里山での聞き書きなのか

里山での聞き書きに参加したい。そんな生徒が6名あらわれたきっかけは、澁澤寿一先生の講演会（7月4日、「関ブリッジジャーナル第23号」参照）でした。

「日本の伝統的な生活スタイルは、近年注目を浴びるようになったSDGsの理念にかなったものである」との澁澤先生の主張は説得力のあるものでした。

今回の聞き書きの舞台となる美濃加茂市や加茂郡の町村は、柿や栗などの果樹栽培、森林資源を生かした木工、栗きんとんや白川茶などの山の味覚、清らかな清流が育む清酒など、里山の魅力がたくさんあります。長年にわたって里山で暮らしてきた「達人」たちの暮らしに学び、文字に起こして記録に残すことが、今回の「聞き書き」の目的です。

昭和20年代以降、日本の農山漁村が「都市化」の波に洗われます。家庭電化製品やガスコンロ、自動車、動力付き農機具が次々と登場し、便利で快適な生活が実現します。昭和20年代までの暮らしを知っている山里の高齢者の方々は、集落に隣接した山々（里山）の恵みを最大限生かし、知恵を出し合い、助け合う、つつましい生活を続けていました。



コンビニやスマホ、インターネット等に支えられた便利な暮らしに慣れ切った現代の高校生が、里山暮らしの話を聞いた時、何を思うでしょうか。視野が広がり、地域や自分の将来のことを考えはじめるヒントが、その中に潜んでいるかもしれません。

聞き書きの成果に関しては、次年度、成果発表会、座談会の場を設ける予定です。